

特集 佐世保の近代化遺産

美しき教会建築

日本のキリスト教伝来に深い関わりを持つ長崎県。

全国の約13%に当たる130以上の教会が点在しており、本市においても多くの教会を見ることが出来ます。

これらの教会は貴重な近代化遺産であるだけでなく、西洋と東洋の建築文化が見事に融合するなど建築物としても優れた造形を誇っています。

今回の特集では、日本におけるキリスト教伝来の歴史を振り返りながら、特徴ある佐世保の教会を紹介します。



***** Sasebo *****

佐世保

開港♡ロールケーキ

3つの特徴!

スポンジ

コーヒーを練り込み、ほのかな苦みを加えました。

クリーム

キャラメルクリームを使用。コーヒーの苦さとクリームの甘さが程良く合います。

ライスプリン

佐世保産の米粉を使用。かわいらしいハート型の金型は佐世保の企業が作っています。



させぼ☆スター商品 商品化第一弾 販売開始!

佐世保の新たな特産品づくりを目指した「させぼ☆スター商品」コンテスト。応募総数194件のアイデアの中から菓子類、水産加工品、農産加工品の3部門の入賞作品を決定しました。そして、昨年8月から地元業者の皆さんと開発を進めていた菓子類部門の「佐世保開港ロールケーキ」を一足早く商品化し、販売を開始しました。冷やしてアイスケーキにしてもおいしい「佐世保開港ロールケーキ」。新しい佐世保の味をお楽しみください。

佐世保開港ロールケーキ 販売価格 1本840円(税込み)

基本レシピを基に、各店が独自に工夫し心を込めて作っているため、食べ比べてみるのも楽しみ方の一つです。開発に参加した下記3店舗で販売しています(平成24年1月10日現在)。取り扱い店は今後も増える予定です。

取り扱い店舗

- 西洋菓子 ティアラ 瀬戸越2丁目7-1 ☎49-9000
- 欧風菓子 葡萄の木 栄町3-22 ☎22-8628
- 佐世保 長崎堂 藤原町39-2 ☎32-0403

☎企業立地・観光物産振興局 ☎24-1111



開発に参加した「ティアラ」の上田直樹さん

世界でも類を見ないキリスト教伝来の歴史

250年の潜伏から復活。

伝来と繁栄

日本におけるキリスト教は、1549(天文18)年、フランシスコ・ザビエルによって伝えられ、西日本を中心に急速に広まりました。特に南蛮貿易港として開かれた長崎にはイエズス会の本部が置かれ、日本における布教の重要な拠点となりました。県内には数多くの教会が建てられ、「日本の小ローマ」と呼ばれるほどキリスト教文化が栄えました。

戦国時代であった当時、戦国大名の中には自ら信徒になる者も現れました。長崎県では大村純忠、有馬晴信といったキリシタン大名がキリスト教を保護したことなどもあり、多くの信徒が生まれました。

弾圧と潜伏

1587(天正15)年、全国統一を目指す豊臣秀吉は「伴天連追放令」を発して長崎を直接支配し、1597(慶長元年)年には宣教師やキリシタン26人を処刑しました(26聖人殉教事件)。これに続く徳川家康も1612(慶長17)年に「禁教令」を発し、キリスト教弾圧が本格化。仏教への改宗が強制され、転宗しない信徒には厳しい迫害が加えられました。当時長崎にあつ

献堂式の数日後、浦上地区の信徒十数名が大浦天主堂に現れ、神父にキリスト教を信仰していることを告白しました。世界宗教史上の奇跡と呼ばれる「信徒発見」です。この知らせは世界中を駆け巡り、大きな衝撃と感動を与えました。信徒たちは禁教から250年もの間、自らで洗礼やオラショ(祈祷文)を伝承していたのです。

その知らせは黒島にも届きました。信徒たちはそのことを確かめるため、ひそかに長崎に渡りました。そして宣教師たちに会い、黒島に600人の潜伏キリシタンがいることを告げました。信徒発見からわずか2カ月後のことで、禁教令がまだ解けていない中で、命懸けの告白であったと言われています。

その後も明治政府は幕府の禁教政策を引き継いだため、幾度も弾圧事件が起きました。信仰の自由が認められたのは、1873(明治6)年、キリシタン禁制の高札が撤去された後のことでした。

信仰の証

1873年、禁教の高札が撤去されると県内各地に教会が建てられました。こうした歴史

た教会もすべて破壊されてしまいました。その後、1637(寛永14)年の島原の乱をきっかけに鎖国が完成。ローマ教皇庁では、日本のキリスト教は完全に根絶したものと考えられていました。

しかし厳しい弾圧にもかかわらず、教会もなく、神父もいない中で、信徒たちは人里離れた浦々や島々に移り住み、潜伏して、ひそかにキリスト教の信仰を守り続けました。これらの人々は「潜伏キリシタン」と呼ばれました。

1700年代後半には、厳しい弾圧や食糧難から逃れるため、西彼杵半島外海地区などの潜伏キリシタンが海を渡り、黒島に移り住んできました。禁教令の時代、黒島でも絵踏みなどが強要されましたが、信徒たちは心を一つにして信仰を守り続けました。

「黒島にも600人の潜伏キリシタンがいます」

1853(嘉永6)年のペリー来航による開国を機に、パリ外国宣教会の神父たちが来日。長崎でも外国人神父により大浦天主堂が建設され、1865(慶応元年)年に献堂式が行われました。

を経て建てられた教会は九州の北西部に数多く分布し、特に長崎県内には、全国の約13%に当たる133もの教会(カトリック教会現勢2010より)が現在も点在しています。

これらの教会の多くは、世界史に類を見ない長期の潜伏からの復活という歴史性を背景として、抑圧からの解放と教会への復帰の喜びという崇高な精神性を象徴しています。貧しい暮らしだったにもかかわらず、自らの財産と労力を捧げて造られたこれらの教会は、信徒たちの強い思いが込められた「信仰の証」とも言えます。

美しい造形

本市には、国指定重要文化財であり、ユネスコの世界遺産暫定一覧表に登録されている「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つ、黒島天主堂をはじめ、数多くの教会が市内各地に点在しています。

これらの教会は、信仰の復活という喜びの結晶であるとともに、建造物としても大変優れており、美しい造形を誇っています。明治時代から昭和初期にかけて建設された市内の特徴ある3つの教会を紹介します。

上の写真は黒島天主堂天井の拡大写真。美しい木目に見えますが、実はすべて手描き。高価な板が使えなかったため、安価な板にニス塗り、その上から刷毛でなぞる「櫛目引き」という凝った技法が用いられています。天井や柱などに施されており、仕上げに相当な時間を費やしたものと考えられますが、「教会堂を少しでも立派に造りたい」という信徒たちの思いが伝わってきます。



三浦町教会

三浦町4-25 ☎22-5701

本市は、1886(明治19)年に海軍鎮守府と軍港の設置が決定してから急速に発展を遂げました。周辺各地からの人の流入も増え、その中にはカトリック信徒も相当数存在していました。三浦町教会はそのような人々のための教会として、1897年に佐世保教会という名称で、谷郷町に設立されました。

現在の場所に教会が建てられたのは、1931(昭和6)年のこと。佐世保港を一望できる丘の上に建ち、佐世保駅を出るとすぐに目に入るため、長く佐世保のシンボリックな存在として親しまれてきました。しかし、戦時中は空襲対策としてコールタールで黒く塗られ、港を望めることから軍部から厳重に監視されたと言います。

1945年6月の佐世保空襲では幸いにも焼失を免

れ、平和な時代になると再び佐世保のシンボリックな存在になりました。

建物は鉄筋コンクリート造りで、ゴシック風の意匠が採られています。外観は正面中央に大尖塔、その両脇に左右対称に小尖塔が配置されているなど、ゴシック建築の特徴である「垂直性」を強調する意図が感じられます。前面の道路から見上げると、丘の上に建っていることも相まって、垂直性がより強調され、堂々たる姿に見えます。

内部は高さを生かした伸びやかな空間が広がっています。天井はリブ・ヴォールト形式で、列柱に施された装飾の意匠や、創建当時の姿をとどめるステンドグラスの意匠も素晴らしいものがあります。



写真左から●美しい尖塔が印象的な三浦町教会●垂直性が強調された外観●色鮮やかなステンドグラス●伸びやかな空間が広がる内部



黒島天主堂

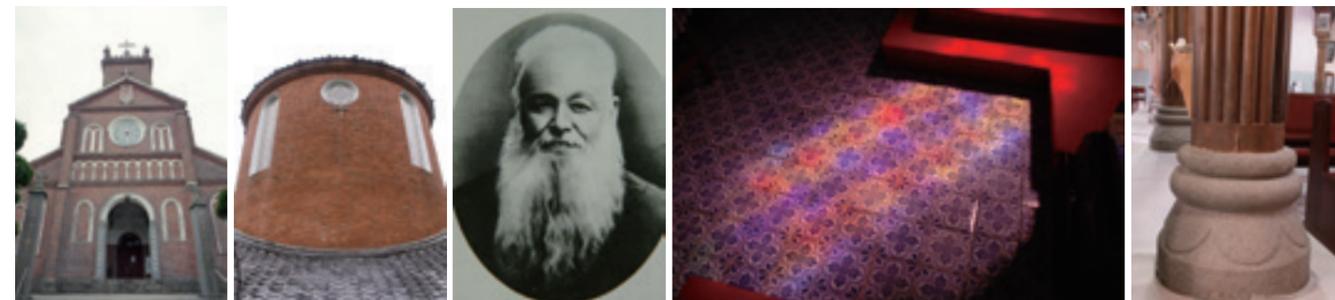
黒島町3333 ☎56-2017

本市の西方約12kmの海上に浮かぶ黒島。現在でも島の人口の約8割がカトリック信徒です。島のシンボルとなっている黒島天主堂は、1897(明治30)年来島したフランス人マルマン神父が設計・指導し、信徒たちの献金や熱心な労働奉仕により1902年に完成しました。建築様式はロマネスク様式で、柱の間のアーチが半円形になっているなどの特徴があります。

建築には約40万個もの「れんが」が用いられましたが、一部は黒島でも焼かれ、信徒たちの手で一つ一つ積み上げられたと言われています。基礎には黒島特産の御影石を用い、祭壇床には有田焼のタイルが貼られるなど、外国のものと地元のもの美しく調和しています。

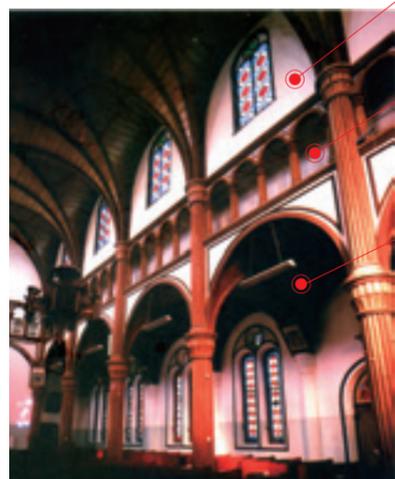
外装や内装など全体的に建設当時の様相をよく残しているほか、フランス製の聖人像、アンゼラスの鐘など、備品も当時のものが保存されており、長崎県を代表する明治期の大型れんが造り教会堂として、国の重要文化財に指定されています。

天井はリブ・ヴォールトと呼ばれるアーチ状の形状で、荘厳な幾何学模様を描いており、別名「こうもり天井」とも呼ばれています。6対ある柱は芯柱の周りに16本の柱を取り付ける「束ね柱」で、土台には黒島の御影石が用いられています。正面祭壇には10体の聖人像が置かれ、その両脇には脇祭壇が置かれています。建築当時は時代を先行した建物で、極めて充実した内装を誇っており、今その美しさは日本一と言っても過言ではないほどです。



写真左から●れんが造りで重厚な雰囲気の外観●美しい半円形状の建物後方も特徴の一つ●優秀な設計者でもあったマルマン神父(「信仰告白125周年 黒島教会の歩み」より)●ステンドグラスからの光が差し込む有田焼タイル●束ね柱と土台に用いられた御影石

三層構造



クリアストリー
トリフォリウム
アーケード

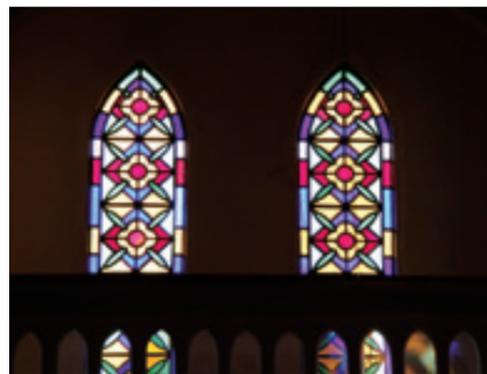
長崎の教会の多くは、内部が本格的な教会建築である「三層構造」になっています。これは単層構造が主流であった中、外国人神父の設計で建てられた大浦天主堂や黒島天主堂が先駆的にこの意匠を採用したため、以降の教会が模範にしたものと考えられています。三層構造はそれぞれ、「アーケード(下段の柱と柱の間)」、「トリフォリウム(アーケードの上の小さな柱が並ぶ部分)」、「クリアストリー(トリフォリウムの上のステンドグラスのある部分)」と呼ばれています。

ロマネスク様式とゴシック様式



教会建築の説明として「ロマネスク様式」と「ゴシック様式」という用語がよく用いられます。ロマネスクとは「ローマ風」という意味で、古代ローマ建築に多用された「半円アーチ」を開口部に用いるなどの特徴があります。これに対してゴシックはアーチの上部が尖る「尖頭アーチ」や「尖塔」を持つことなどが特徴に挙げられます。ちなみに内部の三層構造や丸窓はゴシック様式の特徴であり、黒島天主堂などロマネスク様式の外観を持つ教会の多くは、内装にこれらのゴシック的な要素が取り入れられており、両者の特徴を併せ持っていることになります。

ステンドグラス



美しいステンドグラスは、教会を象徴する装飾の一つです。西洋の教会では、聖母マリアやイエス・キリストの像、聖書の一場面を表現したものが多く、字の読めない人が多かった時代には人々に聖書の教えを伝える役割もありました。明治時代以降に日本で建てられた教会では、ほとんどそのような意匠は見られず、純粋な装飾として取り付けられています。ステンドグラスは、青、赤、黄、緑の4色が多く使われますが、これは人の生活に不可欠な「水」「火(太陽)」「大地」「自然」を表しているという説もあります。

見学時のマナー

教会堂は聖なる祭儀の場、祈りの場です。見学時には必ずマナーを守りましょう。

- ◎堂内では帽子を脱ぎ、私語を慎み、静かに座ってください。
- ◎堂内にある物には触れないでください。
- ◎柵内、内陣(祭壇域)に入らないでください。
- ◎堂内での飲食、喫煙、飲酒は厳禁です。
- ◎堂内での写真撮影は原則的に禁止です(心のフィルムに残してください)。
- ※ミサ、冠婚葬祭などが行われている時は、入堂をご遠慮ください。



浅子教会

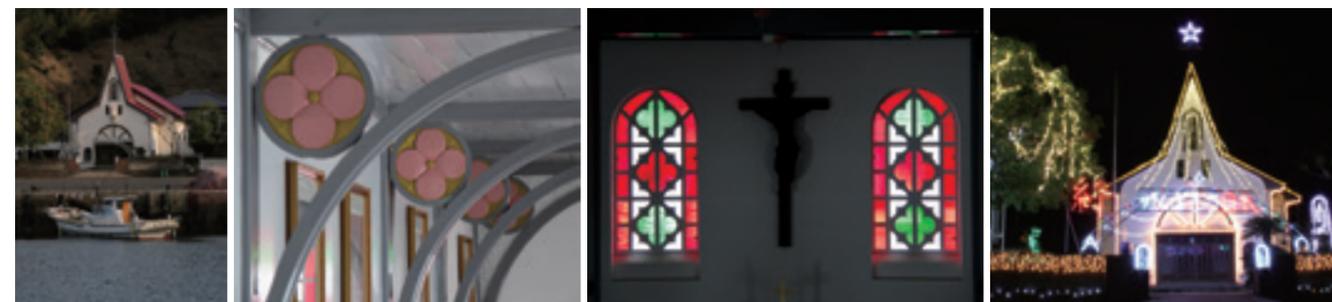
浅子町232-4 ☎68-2583

九十九島の海に面した浅子地区にカトリック信徒が住むようになったのは1884(明治17)年のことで、黒島に住んでいたカトリック信徒が、土地を求めて移住してきたことが始まりと言われています。その後、1925年に仮の教会ができ、1927(昭和2)年に現在地に移されました。

浅子教会は、九十九島を望む小さな入り江に面して建てられています。建物の完成は1930年と言われ、木造平屋建て、外壁は下見板張りの小さな教会です。側面には半円アーチ窓を持ち、玄関部には鐘塔が設けられていますが、これは後世に改築されたものです。窓もアルミサッシに取り替えられており、海辺の過酷な環境にあるため、少しずつ改築されながら維持されてきたことが分かります。

内部の天井は板張りの平天井です。4対ある列柱にはイオニア式(古代ギリシャ建築の列柱様式)の装飾が施され、柱から天井に伸びる持送りの内側には、四つ葉の装飾が取り付けられています。祭壇上部にはめ込まれているステンドグラスの意匠も素晴らしく、質素ながらも随所に優れた意匠を織り込んだ、質の高い教会建築です。

浅子教会では毎年クリスマスになると、美しいイルミネーションが施されます。信徒たちのボランティアとして行われており、浅子地区の冬の風物詩として親しまれています。浅子地区は人口の約8割がカトリックで、その家々でもイルミネーションを飾るところが多く、クリスマス前後には地区全体が光り輝く様子を見ることができます。



写真左から●九十九島を望む入り江に建つ浅子教会●柱上部に施された四つ葉の意匠●祭壇上部のステンドグラス●美しい光を放つイルミネーション